

女性とおしゃれ

首藤 静夫

初夏。水槽の川タナゴの婚姻色が美しい。ただし、婚姻色が出るのはオスだけでメスは地色のままだ。またこの時期、南から渡ってくるオオルリやキビタキなどの声や姿の綺麗なこと。ところがこれもオスだけでメスは地味。

動物学者の竹内久美子氏によると、動物がつかいになる選択権はメスにある、だからオスはメスの気を引こうと懸命に飾るのだそうだ。唯一の例外は人間で、女がおしゃれをし、化粧をして美しく見せようとする。それが謎だと氏は言う。

動物のオスの美しさと人間のおしゃれ、化粧の美しさを並べて論じておられるのがどうだろうか。人間のほうはもっと後天的なものではないだろうか。

人間の化粧が始まった遙かな昔、それは男女を問わなかっただろう。赤い顔料を顔に塗り、入墨をし、鳥の羽などで飾り立てた。まじないや魔除けの意味があったという。男の方が派手だったようで、世界の先住民の習俗を見れば分る。

日本でも平安時代の貴族などは、男女を問わず眉を剃って黛を引き、白粉と紅で化粧をした。『源氏物語』の世界である。男も化粧に励み、和歌を贈って姫君の気をひいた。『平家物語』でも公達が薄化粧をして戦いに臨んでいる。

元来、おしゃれや化粧は身分差の象徴で男女の差ではなかった。それが女性中心とされるのはごく最近のことに思える。端的には戦後、世界中が開放気分になり、女性が街に職場に進出し始めた。この時自己主張として服装や化粧や香水に気を使う文化が生まれたのではないか。竹内氏は謎だというが、動物学や生殖の分野だけでは説明できない。むしろ文化的な変遷というべきだ。

それにしても不思議なのは、電車で目にする一部の女性たちだ。彼女たちはスマホの自撮り画面で自分の顔を熱心に見る、また髪をよくいじる。何も変わらないと思うのだが……。やはり女性特有の何かがあるんだと思っていたら、先日、男子中学生がしきりに手鏡でニキビを気にしていた。ああ、人間！